イエスのことば　第 20 回

イエスがカペナウムに入られると、一人の百人隊長がみもとに来て懇願し、「主よ、私のしもべが中風のために家で寝込んでいます。ひどく苦しんでいます」と言った。
イエスは彼に「行って彼を治そう」と言われた。
しかし、百人隊長は答えた。「主よ、あなた様を私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。ただ、おことばを下さい。そうすれば私のしもべは癒されます。と申しますのは、私も権威の下にある者だからです。私自身の下にも兵士たちがいて、その一人に『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをしろ』と言えば、そのようにします。」
イエスはこれを聞いて驚き、ついて来た人たちに言われた。
「まことに、あなたがたに言います。わたしはイスラエルのうちのだれにも、これほどの信仰を見たことがありません。あなたがたに言いますが、多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。しかし、御国の子らは外の暗闇に放り出されます。そこで泣いて歯ぎしりするのです。」（マタイ 8：5～12）

□イエスの公生涯の起承転結
起：受洗から、メシア宣言（紀元 27 年の春、過越の祭り）を経て、宣教開始まで
承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける
転：弟子訓練
結：エルサレム入城から十字架（紀元 30 年の春、過越の祭り）、復活、昇天

□文脈の確認
1.　「承」の部において、これまでに 12 の権威を見てきた。
　(1)　病の癒しに関する権威。カナでの「遠距離かつ即時」の病の癒しであった。
　(2)　教えに関する権威。ルカ 4：32 は記す、「人々はその教えに驚いた。そのことばに権威があったからである」
　(3)　悪霊に対する権威。イエスが人に憑いていた悪霊を叱って、一言「この人から出て行け」と命じただけで、悪霊は出て行った。
　(4)　病気に対する権威。シモン・ペテロの義母を慢性的な熱病から瞬時に解放した。
　(5)　自然界に対する権威。昼間に網を下ろさせて大漁。ペテロたち 5 人の弟子がパートタイムの弟子からフルタイムの弟子へ。6 番目の弟子としてヤコブが加わる。
　(6)　律法上の汚れに対する権威。ツァラアト患者の清めがなされた。ユダヤ議会が、イエスはメシアである可能性ありと見て、公式調査に入った。
　(7)　罪の赦しにおける権威。中風の人に、神の立場から罪の赦しを宣言したうえで、病気を癒した。公式調査（観察・審問・判定）は観察段階から審問段階へ。

(8) 人に対する権威。取税人レビ（マタイ）を 7 番目の弟子として加え、レビの家でのもてなしを受けて、取税人仲間や遊女と一緒に宴会の席に着いた。調査団からの非難に対して、「わたしは罪人を招いて悔い改めさせるために来た」と言われた。

(9) 人の伝統に対する権威

① 断食の伝統：調査団から断食の伝統に従わないことについて質問され、メシアが来ている今は喜ぶべき時であり、断食する時ではないと答えた。

② 「言い伝え」の伝統：「古い衣・古い皮袋」のたとえ話を通して、イエスはそのような伝統とは関係しないと明言した。これは、パリサイ派が抱いていたメシア像＝メシアは「言い伝え」を完成してくださる、を覆すものであった。

(10) 安息日に対する権威

① ベテスダの池での癒し：紀元 28 年の春、過越の祭りのときに、イエスはエルサレムに上った。安息日に、イエスは、意図的に言い伝えを破って、中風患者を癒やした。エルサレムの指導者たちはイエスを非難したので、イエスはご自身の神性について語った。これにより、指導者たちの中で、イエスを排除しようとする動きが出始める。

② 麦の穂事件：安息日に、イエスが麦畑を通っておられたときのことである。弟子たちが空腹のために、麦の穂を摘んで口に含んだ。そば近くで監視している調査団は、それを見て、安息日に関する言い伝えに反するとしてイエスを非難した。これに対してイエスは、安息日の本来の意味について「安息日はイスラエル民族のために（奴隷から解放されて自由の民となったしるしとして）与えられた」と教えたうえで、「人の子は安息日の主である」と答え、メシアは安息日にしてよいこと、してはならないことを決める権威を持っていると宣言した。

③ 右手の萎えた人の癒し：安息日にイエスが会堂で教えているときに、調査団（ユダヤ教指導者たち）は意図的に手の萎えた人をイエスの目の前に送り込んだ。イエスが安息日に関する言い伝えを破ってその人を癒やすのかどうか、もし癒やしたら安息日破りで訴えようとしたのである。イエスは、指導者たちの意図を見抜いていた。イエスを陥れようと見ている指導者たちの前で、手の萎えた人を癒やした。→　この事件により、指導者たちは、<u>イエスをどのようにして殺そうかと相談し始めた</u>。

(11) 病の癒しに関する権威。エルサレムからガリラヤに戻ると、国の内外から大勢の人々がついて来た。病気に悩む人たちは、イエスにさわろうと押し寄せてきた。イエスにさわると、癒されたからであった。→　イエスは、<u>弟子たちの中から、12 人の使徒たちを選んだ。</u>

(12) モーセの律法を解釈する権威

① これまでは、言い伝えを巡っての、イエスと調査団（ユダヤ教指導者たち）

との対立であった。

② 言い伝えは、中間時代のユダヤ教が、モーセの律法のまわりに設けた垣根のようなものである。当時のユダヤ教指導者たちは、言い伝え（具体的細則）を守ることで、モーセの律法を守ったことになり、義を得て神の国に入ることができると教えた。【補足】中間時代とは、旧約聖書の最後の巻マラキと新約聖書の時代の間の約 400 年。

③ それに対して、イエスは、言い伝えは外面的・形式的に律法に守ったかのように取り繕うだけであり、そのような義では神の国に入ることはできない、と教えた。そして、**モーセの律法が示す真の義とは、どういうものか**を、ここで示した・・・いわゆる「山上の説教」と呼ばれる箇所

④ この説教を通して、イエスは、メシアがモーセの律法を解釈する権威を持つことを示した。この説教を聞いた群衆の反応を、マタイは次のように記した。「イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆はその教えに驚いた。イエスが、彼らの律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられたからである。」（マタイ 7：28～29）

⑤ その結果、「大勢の群衆がイエスに従った」（マタイ 8：1）

2. 本日のイエスのことば

(1) イエスが山から下りて、近くの町、カペナウムに入ったときのこと。カペナウムは、使徒ペテロと使徒アンデレの兄弟の家がある町である。イエスはナザレという村の出身であったが、伝道の拠点はカペナウムに置き、カペナウムの会堂でよく教えておられた。

(2) 一人の百人隊長が使いをイエスのもとに遣わし、しもべの病気を癒やしてくださるようにイエスに願ったときの、やりとりである。

(3) ポイントは次の 3 つ。

① 背景：これまでイエスが 12 の権威を現わし、大勢の群衆がイエスに従うようになった。しかし、ユダヤ人の指導者層は、イエスを殺そうと図っていた。イエスは弟子たちの中から十二使徒を選び、次の段階に備えている。

② 異邦人がイエスの権威を認めた：百人隊長はローマ軍団の将校である。ただし、ローマ人とは限らない。この時期、ユダヤに駐留していた軍団は、ギリシヤ人などで構成されていた可能性が高い。しかし、いずれにせよ、異邦人である。その異邦人が、イエスの権威を認めた。

③ 異邦人の救いの予告：イエスは百人隊長の信仰を高く評価すると共に、将来、世界中の異邦人がアブラハム契約の祝福に与かることを予告した。

□本日の内容

1. 百人隊長について（ルカ 7：1～5）

(1) 百人隊長とは、ローマ軍団の将校。一個軍団に 6 千人の兵士、千人で千人隊 6 つ、

千人隊の中に百人隊が 10 隊。よって、一個軍団に 60 人の百人隊長。実際の戦闘においては、百人隊ごとに動く。百人隊長はローマ軍団の要であり、卓越した戦闘能力・統率力・勇気の持ち主。相対する敵は、まず百人隊長を攻撃対象としたため、戦死するリスクも高かった。

(2) 2 節　この百人隊長は、しもべを重んじていた。当時の主人と奴隷の関係では異例

(3) 3 節　彼はイエスのことを聞き、ユダヤ人の長老たちを送って、自分のしもべを助けていただきたいとお願いした。

(4) 4 節　ユダヤ人の長老たちは、熱心にイエスに願った。彼らは百人隊長がユダヤ人を愛してくれていること、ユダヤ人のためにこのカペナウムの会堂を自ら建ててくれたことをイエスに話した。

① ユダヤ人を愛する・・・創世記 12：3「わたしは、あなた（＝アブラハム→ユダヤ人）を祝福する者を祝福する」

② 会堂を自ら建ててくれた・・・ローマ軍団は、道路、橋、石造建物を建設する能力を持った集団であった。土木工事、建造物の設計、原材料の調達加工、施工まで一貫して自分たちで可能であった。

(5) マタイの福音書では、百人隊長本人がイエスのもとに来ているかのように記されているが、当時のユダヤ人の理解では、使いの者は本人を代理しており、本人が来たことと同じだからである。マタイの福音書は、ユダヤ人に向けて書かれた福音書である。

2. 百人隊長の信仰（ルカ 7：6～8）

(1) 7 節　ただ、おことばを下さい。そうして私のしもべを癒やしてください。

(2) 8 節　と申しますのは、<u>私も</u>権威の下に置かれている者だからです。

- 「私も」・・・自分が権威の下にあるように、イエスも権威の下にいることを認めている。イエスの権威は天の神から来ていて、イエスがその権威を示しておられることを、百人隊長は認めた。すなわち、イエスをメシアとして認めたのである。

(3) 8 節　私自身の下にも兵士たちがいて、その一人に『行け』と言えば行きますし

- 百人隊長はことばによって権威を行使する。ましてイエスはメシアである。その権威は自分など及ぶところではない。イエスも、当然ことばだけで、しもべを癒やすことができると、彼は信じた。

3. イエスの対応（ルカ 7：9、マタイ 8：10～13a）

(1) イエスの評価（ルカ 7：9、マタイ 8：10～12）

(2) イエスの応答（マタイ 8：13a）「行きなさい。あなたの信じたとおりになるように。」

4. 結果（マタイ 8：13b、ルカ 7：10）・・・ちょうどそのとき、そのしもべは癒された。使いに送られた人たちが家に戻ると、そのしもべは良くなっていた。